

1 外国語科の導入のポイント

○中学年の外国語活動の「聞くこと」、「話すこと」に加え、高学年の外国語科では「読むこと」、「書くこと」の領域が設定している。

○教科化により、外国語活動の「慣れ親しむ」ことから一歩進んで「活用する、定着する」ことを求めている。

○より小・中・高等学校の接続が重視され、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、国際的な規準※などを参考に、五つの領域（「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」）で英語の目標を設定。より弾力的な指導ができるよう、2学年間を通した目標としている。

※欧州共通言語参照枠（CEFR）：欧州評議会が示す、外国語の学習や教授等のためのヨーロッパ共通参照枠

2 外国語科の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

○「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは

外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられる。

※英語の目標及び内容の詳細については、小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編の付録6『『外国語活動・外国語の目標』の学校段階別一覧表』、付録7『『外国語の言語材料』の学校段階別一覧表』、付録8『『外国語活動・外国語の言語活動の例』の学校段階別一覧表』（P

168～P171)を参照すること。

3 内容の取扱いのポイント

(1) 音声の指導

英語には日本語にない発音が多くあり、日本語と英語の音声の特徴や違いに気付かせることが大切である。また、英語を話すときには一語一語を切り離して発音するのではなく、複数の語を連続して発音することが多いこと、英語は日本語とは違って強弱によってアクセントを付ける場合が多いことなど、日本語とは異なるリズムを理解させ、習得させることが重要である。

(2) 文字の指導

高学年の外国語科では、中学校の外国語科との連携を意識した指導が求められる。中学年で文字の名称を聞いてその文字を認識する指導が行われ、高学年では文字を見て名称を発音できるように指導すること。

(3) 「読むこと」、「書くこと」の指導

「読むこと」については、活字体で書かれた文字を識別し、その名称の読み方を発音することができるようにすること、中学年の外国語活動を通して音声で十分に慣れ親しんだ語句や基本的な表現の意味が分かるようにすることが目標として示されている。「発音と綴り」とを関連付けて読めるようにすることについては中学校以降で指導することとなっている点に十分配慮すること。

また、「書くこと」については、文字の形や高さの違いを意識させることは重要であるが、文字の細部にまでこだわる指導は避けること。文字を書くことへの興味を失わせることにつながるようなドリル的な練習ではなく、文字の形の特徴を捉えて指導するなどの工夫が必要である。また、語順や意味を考えさせながら書き写させたり、「書きたい」と思わせるような言語活動の設定を通して少しずつ書く、ということをおこなうこと。

(4) 語彙の指導

五つの領域別の目標を達成するために、2学年間で指導する語は、第3、4学年の外国語活動で取り扱った語を含む600～700語程度となっている。これらの全てを覚えて使いこなさなければならないということではない。聞いて意味が理解できるようにする語彙と、話して表現できるようにする語彙が中心であり、それらを全て文字で書けるようになるまでは求めているわけではないので、リスト的に覚えさせるのではなく、活動の中で繰り返し活用させることが大切である。

(5) 障害のある児童への配慮

例えば、外国語活動における配慮として、次のようなものが考えられる。

- ・ 音声を聞き取ることが難しい場合、外国語と日本語の音声やリズムの違いに気付くことができるよう、リズムやイントネーションを、教員が手拍子を打つ、音の強弱を手を上下に動かして表すなどの配慮をする。また、本時の流れが分かるように、本時の

活動の流れを黒板に記載しておくなどの配慮をする。

- ・ 1 単語当たりの文字数が多い単語や、文などの文字情報になると、読む手掛かりをつかんだり、細部に注意を向けたりするのが難しい児童の場合、語のまとまりや文の構成を見て捉えやすくするよう、外国語の文字を提示する際に字体をそろえたり、線上に文字を書いたり、語彙・表現などを記したカードなどを黒板に貼る際には、貼る位置や順番などに配慮する。

4 授業づくりのポイント

(1) 学級担任の必要性

コミュニケーションに対する積極的な態度を育成するためには、児童に自分の思いを伝えたい、相手のことをもっと知りたいと思わせるような話題や活動設定が必要であり、そのためには、児童を深く理解していることが指導者に求められる。

学級担任は、児童の興味・関心や生活についてよく理解しており、児童が楽しむ活動を考えたり、児童が他教科で身に付けた知識や技能を関連付けた活動を取り入れたりするなど、効果的な学習活動を行うことができる。児童と関わり合って自ら英語に慣れ親しもうとする学級担任の姿勢こそが、児童の外国語に対する興味・関心を高める何よりも大切なきっかけとなる。

(2) 「外国語」における言語活動について

外国語科において、言語活動は、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うという言語活動の中では、情報を整理しながら考えなどを形成するといった「思考力、判断力、表現力等」が活用されると同時に英語に関する「知識及び技能」が活用される。つまり、英語を用いているけれども考えや気持ちを伝え合うという要素がない活動や、英語を用いず日本語だけで情報を整理しながら考えを形成する活動は、外国語においては言語活動とは言い難い。発音練習や歌、英語の文字を機械的に書く活動は、「練習」である。「練習」は、言語活動を成立させるために不可欠であり重要だが、練習だけで終わることのないように留意する必要がある。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり

「主体的な学び」の点からは、発達の段階に応じて、児童が興味関心を持つことのできる題材や身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を取り上げ、学習への動機付けを図ることが大切である。単元の中でコミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し、学習の見通しを立てたり、振り返る場面を設けることが重要である。

「対話的な学び」の点からは、単元の中で他者と情報や考えを伝え合う活動を設け、他者を尊重しながら対話を図る活動を設定したり、他者の考えに触れて自らの考えを振り返ったり深めたりするよう促すことが大切である。

「深い学び」の点からは、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を授業の中で設定し、児童にとって必然性のある活動を効果的に取り入れ、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱が統合的に育成されるよう単

元の見通しを立てて計画をすることが必要である。

以下の流れを単元や授業の中に位置付け、「主体的・対話的で深い学び」をしていくことが大切である。

【コミュニケーションの目的・場面・状況等を理解し、設定する。】



【目的・場面・状況等に応じて情報や意見などのやり取りをするコミュニケーション活動の見通しを立てる。】



【対話的な学びとなる目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う。】



【学習のまとめと振り返りを行う。】

参考資料 「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」 文部科学省